

# ロータリーミーティング

テーマ

## 21世紀への懸橋

本音で語ろう教育問題

第1部=基調講演 第2部=パネルディスカッション



司会進行  
地区副幹事 村瀬 雄一郎

### 基調講演 講師プロフィール

- 講師 松本 宏 (半田RC)
- ・1996~'97年度R.I.第2760地区ガバナー
  - ・半田市教育委員会委員 24年間歴任
  - ・松本小児科医院院長

### パネルディスカッション 出席者プロフィール

- コーディネーター 横内 恭 (名古屋大須RC)
- ・1996~'97年度名古屋大須RC会長
  - ・名古屋市教育委員会委員長
  - ・中日新聞専務取締役本社代表
- パネラー 内藤 明人 (名古屋西RC)
- ・1998~'99年度R.I.第2760地区ガバナー
  - ・文部省理科教育及び産業教育審議会委員
  - ・リンナイ(株) 取締役社長
- 須田 寛 (名古屋RC)
- ・1997~'98年度名古屋RC会長
  - ・東海旅客鉄道(株) 代表取締役会長
- Hans-Jürgen MARX (名古屋東RC)
- ・南山大学学長
- 石田 喜運 (豊橋ゴールデンRC)
- ・1993~'94年豊橋ゴールデンRC会長
  - ・1997~'98年度地区ライラ (小) 委員会委員長
  - ・(株) 石田建築設計事務所
- 木村 友保 (千種高校インターアクトクラブ顧問)
- ・県立千種高等学校教諭

大会第1日目 ホテルナゴヤキャッスル青雲の間  
ロータリーミーティング





## 第1部 基調講演

# これからの教育に望むこと

講師／パストガバナー松本 宏

大会第1日目 ホテルナゴヤキャッスル青雲の間 26 ロータリーミーティング

21世紀を担う青少年を健全に育成することは、全世界の課題であります。わが国の青少年をめぐる問題の現状をみますと、家庭や地域社会など青少年を取り巻く社会環境の変化と物質的な豊かさや生活の便利さの進展の中で、青少年に心の豊かさや精神的なたくましさといった点で欠ける面が生じてきています。少年非行は依然として憂慮すべき状況にあります。これは成人社会の乱れに起因している面が多く、その正常化と人間性の向上を伴わなければ、理論的にもよくなることではありません。

こうした中で、高齢化、国際化、情報化など社会の変化は急速に進んでおり、今後わが国が創造的で活力ある社会を築いてゆくためには、現在の社会変化に順応できる資質と意欲を持つ、活力のある青少年を育成することが強く求められます。

豊かな情操と創造性そして思いやりの心の育成や連帯意識に基づく実践的な社会性と相互理解に基づく連帯感と協調の精神を養うことが必要であります。

青少年の健全育成を推進するに当たっては、家庭、学校、職場、地域を通じて青少年が感動を覚えらるるような機会と自然や人との触れ合いを深めることのできる環境、そしてさまざまな体験が得られる機会を充実することが必要と思われまます。

そこでこれからの教育について考えてみたいと思います。教育の原点は、出生時からの養育に始まります。最も本質的な親子関係が、新生児期より乳児期に確立する母子関係、すなわち母子相互作用 (mother infant interaction) —母と子が互いに感覚系を介しての人間的な行動のやりとりを行うことに

より、ここに好ましい母と子の絆 (mother infant bond) が形成されます。このことにより、こどもの母親に対する基本的信頼 (basic trust) が確立します。このことが、将来のこどもの発達過程で重要な要素となります。アメリカのブッシュ前大統領は、今世紀最後の10年を「脳の10年」と呼び、全米的な活動を始めました。2000年から3000年までは、世界的にこどもを大切に作る時代が来ることが想定され「脳のセンチュリー」として、こどもの脳が大切に、人類がこれから地球上で生きていくsurviveするためにも、こどもに大きな関心がよせられています。最近の研究によりますと、新生児脳は250億の神経細胞があり、それが10歳頃までに、使用されない細胞はselection stabilityにより140億に整理されてしまっています。さらに重要なことは、脳の可塑性 (Plasticity) であります。これは出生後の環境が脳の発育に与える影響で、刺激が入ると脳の組織になんらかの変化が起こってもとに戻らないということ、いかに乳幼児期の養育が大切であるかを知ることができます。良い刺激をあたえることは、脳の発達に好影響を与えます。家庭教育におきましては、こどもに対する過干渉、過保護、溺愛が顕著である一方では、こどもを放任している状態が見られます。特に親達の人格の未成熟、自分本位などが、こどもの人格形成をゆがめる要素となっています。こどもの人格形成の柱は、意欲と思いやりの発達にあります。意欲とは、いきいきと行動する姿として現れ、それはこどもに十分に「自由」を与えることにより発達するものです。「思いやり」は相手の立場に立って考え、相手の気持ちをくむ能力であります。これは周囲にいる大人

から「思いやり」を受けることにより、少しずつ発達するものであります。現在のこどもたちにみられる人格形成のゆがみは、意欲の乏しさと思いやりのなさの二つに集約されます。意欲の乏しさは、自発性の発達を抑制するような子育てに起因しています。思いやりのなさは、周囲の大人が思いやりを示してやらないからであります。最近のこどもたちは、自己中心的行動が目立ちます。これは家庭における教育機能の低下に起因するものであります。基本的な生活習慣、社会ルールなどは、当然家庭で教えるべきことでもあります。

最近「キレるこども」という言葉が、マスコミ等で使用されていますが、これらのこどもたちは忍耐力を欠き衝動的な行為に走る結果であります。日常的な社会ルールを親が、教師が、社会が自ら自分の日頃の行動の上で示し、人間モデルとなることが必要ではないでしょうか。最近「家庭は躰をしなくっている。教育力が低下している」という世間のイメージとは正反対に、一部の親は以前よりも、我が子の教育に熱心で「手をかけ過ぎる」傾向もみられるということです。その例といたしまして、多くの母親は「人格も学力も」という、全方位型の教育関心を持っており、一昔前の「教育ママ」というイメージより「完璧なこどもPerfect child」を作り上げるべく、母親たちが「完璧な母親Perfect mother」を演じようとしているということでもあります。しかもその上に親の求める、我が子の将来像という鑄型にはめこもうとしていることです。これではこどもに自由はなくなり、心の余裕もなく、ストレスがたまって、色々の問題行動が生まれる原因となります。ウニコットとい

う有名な小児科医で精神分析学者は「good enough mother」ほどほどの母親がベターであると言っています。ほどほどの母親で充分で「完璧な母親」はむしろ危険ということです。物事はバランスが大切であり、寛容さや、あいまいさ (ファジー-fuzzy) が必要であります。最近就労する母親は、年々増加の傾向にあります。21世紀は婦人の社会参加と男性の地域家庭参加の双方が促進され、男女の共同参加によって与えられる男女共同参加型の社会になることが想定されます。その上に少子化、核家族化、高齢化社会と、こどもを取り巻く社会環境は大きく変貌し、家庭における親子のふれ合いも粗になる傾向にあります。そこで親たちは、こどもの発達過程を熟知した上で、そのこどもの年代にあった養育や対応をしなければ、こどもの健全育成は望めません。

次に「心を育てる教育」について述べさせていただきます。

社会の変化に対応できる、心豊かな人間の育成という基本目標のもとに、思いやりの心、生命を尊重する心、文化に感動する心の育成が求められています。こどもたちが、人間としてのあり方や、生き方について自覚を深めるとともに人間性を豊かに育むことができるように、心の教育の充実が求められます。

ではここで「新しい時代を拓く青少年の心を育てる」上で、特に重要と思われる点につきまして考えてみたいと思います。

まず「生きる力」、則ち、自分で課題を見つけて、自ら学び、自ら考える力、そして正義感や倫理感など豊かな人間性を身につけることでもあります。子供たちに豊かな人間性を育むためには、大人社会全体のモラルの低下を問い直す必要があります。

次にもう一度、家庭のあり方を問い直そうではありませんか。思いやりのある明るい円満な家庭を作ること。夫婦間で一致協力して子育てにあたること。家族の間で会話を増やし、家族の絆を深める。そしてこどもの個性を大切に、未来への夢を持たせること。基本的社会ルールをしっかり家庭で教えることなどが求められます。

さらに地域社会の力を生かして、地域での、子育て支援の活動を推進することも必要であると思えます。また異

年齢集団の中で、子供たちに豊かで多彩な体験の機会を与えること。ボランティア・スポーツ・文化活動・青少年団体の活動などを活発に展開すること。こどもの心に悪影響を与える有害な情報を規制することなどでありまます。

次に学校における心の教育として、道徳教育の充実。問題行動には毅然とした対応をすること。そしてゆとりある学校生活の中で、こどもたちの自己実現を図ることに手を差しのべてやり、社会の変化に対応できる心豊かな人間の育成という基本目標の元に、思いやりの心、生命を尊重する心、自然を大切に、さらに優れた文化に感動する心などの育成が望まれるのであります。

次に「21世紀に向けての教育はどうあるべきか」について考えてみたいと思えます。

20世紀から21世紀へと時代が大きく変わろうとしています。当然のこと教育も変化の過程にあると思えます。

教育には、時代の変化によって変えなければならない面と、いかなる時代になっても変わってはいけない面があります。

どのような時代においても、人間が人間らしく生きていくためには、どうしても教育しておかなければならない基本的な部分と、一方では、その時代を生き抜いていく能力を与える部分とがあります。

どうしても教育しておかなければならない面には、まず自己統制力を養う教育と、先人たちが営々として築いてきた人類の知的遺産の後世への伝承であります。それと学校制度と教育課程の問題であります。現在の教育課程は非常に過密で、児童生徒が追いついていくのに大変です。そこで「ゆとりの教育」が提唱されるのです。「minimum essential」の基準をどのように決めるか、難しい問題であります。学校週5日制になり、しかもこどもたちの知的レベルを下げないようにするには、カリキュラムの精選とその作成が非常に難しくなります。さらに入学試験の改善も大切な項目であります。

人間は多様な存在であり、その子供の持っている個性を引き出し、その才能を育てる教育が求められます。我が国の義務教育は、国民全体の教育水準を上げることには成功して、戦後の高

度経済成長の原動力となりましたが、この知識習得型の教育から、これからは物考える力を強くする、そして創造性を育てる教育へと変えてゆることが必要です。

時代は、複雑化、流動的な方向に動いています。一言で言えば、予測の難しい時代に入っています。これは、かなり長く続くであろうと考えられます。そういう状態を作り出した原因は何かといえば、科学技術の進歩なのです。科学技術の進歩が、こういう時代をつくり出したということは、科学技術の進歩が止まらないかぎり、この複雑かつ流動的で不透明な時代は、かなり長く続くことが想定されます。それに対してどういった教育的対応をするかを考えていくことが求められます。科学技術は、一方では光をもたらしますが、他方では影をもたらします。このことを念頭に置いて、教育的対応をすることが大切であります。

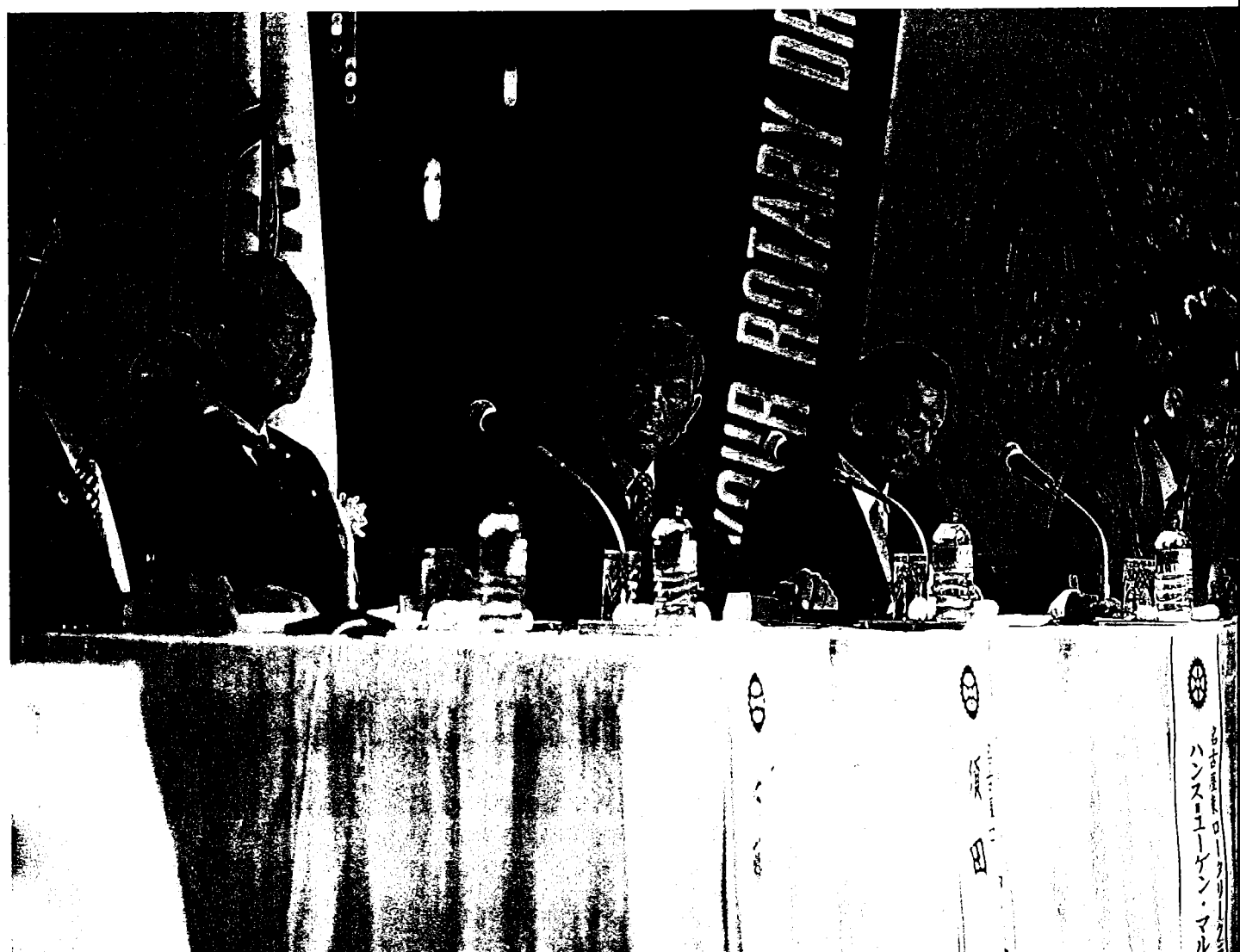
科学技術の進歩、情報化社会の進展、国際化の発展、そして超高齢化社会は必ず来ることが想定されます。その時に対応できる能力を養成しておくことが、これからの教育に求められると思うのであります。

最後に、次世代を担う青少年の健全育成に向けて、我々ロータリアンは、どのように活動すべきかを考えてみたいと思います。「新世代のための月間」には、「ロータリアンは新世代の模範 Every Rotarian an Example to Youth」をスローガンとして掲げていますが、青少年活動の推進にあたりましては、彼等の良き先輩として、ともに学び、ともに実践し、喜びも悲しみも、互いに分かち合うというスタンスが望まれます。

新世代の自主的な活動をサポートしながら、共に行動することを期待する次第でございます。

## 第2部 パネルディスカッション

# 本音で語ろう教育問題



司会 村瀬 雄一郎

—どんな意見が出てまいりますか、それぞれのお立ち場からご発言をいただきます。

最初にパネラーの方々をご紹介します。小谷R.I.会長代理を改めてご紹介いたします。このロータリーミーティングの最後に講評をお願いすることになっています。そのお隣はコーディネーターをお願いしています名古屋大須ロータリークラブ会長の横内恭さんです。横内さんは中日新聞専務取締役でして、また本年名古屋市教育委員会委員長の要職にも就いておられます。

次にパネラー5名の方々をご紹介します。

内藤明人ガバナーです。内藤さんをご承知のようにリンナイの社長さんで、また一方、文部省理科教育及び産業教育審議会委員の要職に就いておられます。

次に名古屋ロータリークラブ所属の須田寛さんをご紹介します。須田さんは前年度名古屋ロータリークラブ会長で現在は東海旅客鉄道 代表取締役会長です。企業経営はもちろんのこと教育問題も熱っぽく語っていただけることと思います。

次に名古屋東ロータリークラブのHans-Jürgen MARXさんです。MARXさんは南山大学学長であり、今日は外国人から見た日本の青少年問題あれこれについて語っていただきたいと思っております。

次に豊橋ゴールデンクラブの石田喜運さんです。石田さんは石田建築設計事務所の代表、豊橋ゴールデンクラブのクラブ会長、そして前年度は地区ラ

イラ(小)委員会委員長を務めておられました。また豊橋市内の高校生ボランティアグループのネットワークづくりをされて、地元で青少年活動の育成に力を注いでいらっしゃいます。

最後になりましたが千種高校インターアクトクラブの顧問として非常に熱心に取り組んでいらっしゃいます愛知県立千種高校教諭の木村友保先生です。

ではコーディネーターの横内さん、よろしくお願いいたします。



コーディネーター 横内 恭

【横内】横内です。コーディネーターをさせていただきます。ただ今パストガバナーの松本さんからいただきました基調講演は大変示唆に富んでいて、小さいときの親子関係(スキシップ)が大変重要であるというお話でした。

そこで思い出したのが作家の犬飼道子さんの話です。4歳ぐらいのときに布団を入れる戸棚で遊んでいたところ、柱に頭をぶつけた。戸棚の柱を叩いて「このやろう」と泣き叫んでいたから、お母さんが「みっちゃん、あなたも痛かったけどその柱も痛まっているよ。だからなでてあげなさい。そして仲直りをしなさい」と言って彼女を抱き締めてくれたそうです。彼女はそれをずっと覚えていて、「人間の教育とは、幼児の5歳までが大事なのではないか」と言っています。

余分なことを申しましたが、それではパネルディスカッションに入らせていただきます。

最初にちょっとお断りを申し上げます。

今回のこの席は“本音で語ろう”と

いうことですので、パネラーの皆様方には、肩書とか役職とかちょっと外していただいて、「さん」づけで呼ばさせていただきます。

それから進行の方法は、おひとかた約10分前後、順番にお話しいただきまして、ひと通り終わりましたから、また3~4分、追加されるご意見あるいはご提案とかございましたら、ご発言願いたいと思います。

では座っておられる順に最初は内藤さんから口火を切っていただきます。よろしくお願いいたします。



パネラー 内藤 明人

今は社会全体が心を失い責任を失っている。

これは戦後教育で道徳を嫌ったため

【内藤】教育問題については、私もガバナー訪問させていただいて、ユーイズム、それから“新世代に光を当てよう”という方針でやってまいりました。これは基本的には教育問題に帰することです。そういう意味で先程の松本先生のお話に非常に感銘を受けました。非常によく整理されておりまして、どのお言葉ももっともなことだと思っています。

私は職業人の立場から、「現在の日本の次世代を担う青年がどのようになっているか」ということを思いますと非常に危惧している次第です。

戦時中に非常に精神主義が過ぎたために、戦後は6・3・3制となり、また肉体と精神が形成される青年期をデジタル的な〇×の入学選抜「心」という面を失った物理的教育ばかりに追われて

いる事に大きな影響があるのではないかと思います。

もちろん、その初めには松本先生がおっしゃった幼児の基本的な教育が大切です。母乳を飲ませて子供の目と目を合わせるところにお互いのコミュニケーションがあるのですが、最近では母乳を与えないで、横を向いてミルクを飲ませるというように母と子の意志の疎通がなくなりました。これでは遊漁場の魚と一緒にではないか、極端に言えばそういうふうにも思えます。

一方、学校教育も〇×だけを重視しています。私は先程ご紹介いただいたように文部省の審議委員を2年間やらせていただいたのですが、文部省側は「産業界に役立つ教科をもっと増やしたいので教えてほしい」と言います。「教科が増えたら生徒に負担がかかるのではないかと我々が言っても、「すぐ間に合う学生を養成するためのアドバイスをいただきたい」と言います。どんな会社に入ってもすぐ間に合うようなことはないで、それよりも応用できる頭、そこに打ち込める信念と仕事のできる精神力、そういうものをもっと高めて実業界へ入ってもらったほうがいいと思うのですが、それでは文部省の実績にならないようでして、「とにかく教科を増やしてほしい」と言われ、そのことで言い合ったこともあります。

民主主義と言っても、やはりキリスト教は責任と義務があるということを当然わかっていますが、戦後の日本の教育は道徳とかそういうことを嫌ったために、〇×式だけの物理的で金と数だけを重視した教育で無責任になってしまいました。

今の住専問題にしても最近の金融問題の解決策にしても誰も責任を取らない。これは単に子供の世界だけではなくて社会全体が心を失った、責任を失ったということだと思います。

お金にも裏と表があるように、人には責任と義務があるのです。変に主張ばかりするのではなくて相手の心を考えれば自分に責任をもつということになります。そういう人間生活をするうえでの基本がないといけません。キリスト教の方はそこで自ずから考えます。日本は昔は儒教というのがあったのですが、今は、日本は宗教というものがなくなりました。仏教というものが弱くなっています。儒教的な考え方

——父母には孝、そして兄弟や友とは仲良くし、そして皆さんと相和していくという心——を、日本人の今の立場としてはもう一度再議すべきではないかと思っています。

【横内】ありがとうございます。内藤さんは、心を失い責任を失ってしまったという戦後教育について鋭く指摘されました。次に須田さんよろしくお願いたします。



パネラー 須田 寛

## 2つ提言します。 教育関係での経済圏を完結したいこと、複線型の教育にしたいこと

【須田】私だけが教育関係の肩書が全くないようで、言わば素人です。本音を語るには最もいいかも知れませんが、ややピントの外れたことを申しあげるかも知れませんのでお許し願います。

私は及ばずながら経済界の末席に籍を置かせていただいておりますが、ご当地中京圏の教育問題を見てみると、どうも気になることがいくつかあります。2つばかり申しあげて、私なりの解決策をご提案申しあげたいと思います。

問題点の第1は、「教育の面から見た場合に、この中京圏は完結した経済圏とは言えない」と断ぜざるを得ないということです。

それには2つの現象があります。ひとつはこの付近には単身赴任者が非常に多いということです。金曜日の夜に名古屋駅のホームに行きますと、いかに多くの人々が自宅に帰っているかということが分かります。私どもの商売

からしますと非常にありがたいことですが、そういう方々——この地域の有力企業の支店長さん、あるいは出先の官庁のトップの方々——は今日のような土・日には、このロータリーの地区大会にお出になっている方々を除いて、恐らく名古屋にはいないと思います。何か事があつたらいいだろうかなあと考えますと、これは一種の空洞化だと思います。

当然単身赴任をしていらっしゃる方はご家族と一緒にいないわけですから、触れ合った教育がその家庭では十分でないことは言うまでもありません。なぜその方々は単身赴任かと言いますと「子供の教育問題です」とおっしゃいます。子供さんと一緒にいなくて、なぜ子供の教育問題が論ぜられるかよく判りませんが、この辺にひとつ問題点があるように思えてならないのです。

もうひとつの現象は、驚くべきことだったのですが、この付近の代表される方々、しかも生粋の愛知県人と自他共に許しておられる方々のほとんどすべてこの地方の大学卒業者ではないということです。現にお隣においで現ガバナーも前ガバナーも次期ガバナーも生粋の愛知県人でいらっしゃいますけれども、名古屋の大学のご出身ではありません。これでいいのでしょうか？

首都圏とか近畿圏とか、あるいはこの地方よりも小さい経済圏と言われている北海道札幌経済圏とかあるいは福岡とか仙台などではもっと多くの比率の方々が地元の大学に進学するようですが、この付近では名古屋市内の大学入学者の定員を全部合わせても東京6大学の一つに過ぎないそうです。この点が他の経済圏と非常に違う点だと思いますし、そここのところに違和感があります。

この地域に単身赴任者が非常に多いということは、他所の大学に子供を進学させるためですから、この付近の教育問題から外れた人になるわけです。

しかも、この付近の方々も地元の大学に進学しないで他所の大学に行く方が多い、しかも生粋の名古屋人であるとおっしゃっている方々にそれが多いということはいったい何なのか？ この教育に何かこの付近の人々を満足させないものがあるのではないかと

やはり経済圏というのはいろんなも

のがワンセット揃って初めてまとまった経済圏だといえると思います。東京圏や関西圏はかなり揃っていますが、中部圏を教育面から見た場合には、まだ未熟であると言わざるを得ません。

それではどうしたらいいかと言うと、この付近にもっと特色のある学校をつくる必要があると思います。南山大学の女性に関する限り非常に全国から多くの人々が入学するような学校になって来ました。これはやはり宗教を前提とする特色のある教育をおやりになっているからだと思うのです。この教育を受けるためにはそこに行かなければいけないという大学がこの付近には非常に少ない。東京や大阪にはそのような大学が一杯あります。

何か特色のある大学をつくれれば、東京に単身赴任をしていても、この地域の大学に子どもさんを進学させて、名古屋にくるはずで、もう少しこの地域に、全国の人が入学するに耐え得る、この付近で完結できるような特色のある学校が生まれて、地元の方々がすべて地元の大学に進学し、他の地域からも多くの人々がこの大学に入学するようにならないものだろうか、ということが第1点です。

第2点目について申しあげますが、この付近は産業技術の中核圏域です。これは自他共に許しているところで私もその通りだと思います。「日本の産業革命の発祥の地」だと言っても過言ではないと思います。

しかるに、その地域であるだけに問題になっているのが後継者の育成です。特に最近、理工科離れと言われてる現象で、技術系の人々の育成ないしは後継者というものがこれから非常に寒い、寂しい状態だと聞いています。そうなりますとこの地域の経済はまた空洞化していくわけで、経済界は憂慮すべき事態になってくると思います。

なぜそういう現象が起こるのだろうか、問題点を整理してみます。これは現在の教育システムが単線教育になっているからだと思うざるを得ません。

単線とはどういうことかといいますと、技術者を養成する教育も事務系を養成する教育も高校までは全く同じ教育課程で、大学でも最初の2年間は教養課程で、後の2年間だけが専門課程だということです。4年生になると就職活動をしますので1年だけしか専門

課程をやらない、極論すればそういうことが起きています。

したがって一流大学の工学部の先生に聞きますと「大学院を出なければ技術課程を勉強したことにならない」とおっしゃいます。現に私どもの会社に入ってくる土木系統や機械系統の技術者はほとんど大学院を出ています。大学院を出なければ役に立たないというのでは大学教育ではないのです。大学院というところは学術を研究する所ですから社会人の養成とは違うと思うのです。

単線のもうひとつの弊害は、平等を叫ぶあまり一律教育に徹し過ぎてはいないか、ということです。能力は人によって違います。みんな同じ能力というのは絶対にあり得ない。ところが今の学校教育は皆一緒で、一人でも抜きん出た人がいればみんな足を引っ張っています。

戦前、私どもが子供のころには飛び級というのがありました。中学の4年生から旧制高校に入る制度です。私はその恩恵には浴しませんでした。私どもより数年前は、小学校の5年生から中学に進学する飛び級もあつたそうです。そうやって早く進級した人々は頭の柔軟なうちにいろいろな学校教育を修めることができました。

そして理系の教育は高等工業学校から大学の工学部に行くコースがはっきりと確立されていきました。したがって専門的な教育をかなり早くから修めることができたと思います。いわゆる複線型になっていて、途中で切り替えポイントが入っていて理系から文系への切り替えもできました。今はそうではありません。もちろん工業高校はありますが、卒業してすぐに就職する技能者養成コースであり、上級進学を旨としているものではありません。したがって上級進学を目指す人はどうしても普通高校に行ってしまう。そうなると専門教育を得る機会が極めて短くなり、十分な技術が養成されないままに社会に出てしまうということがあると思います。

これを鉄道に例えるならば、待避線も追い越し線も何もない単線の上を列車が並んで数珠つなぎにゆっくりと同じ速度で走って行く、そんな状況です。東京の小田急電鉄や東武鉄道の通勤時間帯のようなもので、急行でも速度は一緒にドアが開かないだけです。確か

に大勢の列車を運ぶにはいいのですが中に乗っている人はたまったものではない。

これが今この地域で行われている、あるいは全国で行われている教育ですが、この地域のように先端技術の中核圏域たんとすると、このような教育をやられたのではやがて後継者が育たなくなります。理工系の人々が育たなくなります。そうなったらこの地域の先端技術はどうなるのか？ そんな心配がされてならないのです。

したがって、単線型教育を是正して能力に応じたような教育を与えられるように考えられないものか、そしてまた、いろんな切り替えポイントを入れて、個人の考え方によって教育を選ぶような事を考える、また能力に応じた教育——足を引っ張らずに、うまく受け止めて社会のために役立つようにみんなバックアップしていく、そうしないとこの付近の産業技術の中核圏域では生きていけないような気がします。

以上2点、すなわちこの付近が教育の面で完結した経済圏になっていないことから生じる空洞化のような現象を経済界としては大変心配しているということ。もう1点はこの付近の先端技術の中核圏域としての将来を考えた場合に、後継者の育成の面から単線型教育は大変心配だ、何とか複線型の能力に応じた教育をできないものかということ。教育の素人が大変口はばつたいことを申しました。ありがとうございました。

【横内】どうもありがとうございます。大変明快なご提言です。私も地元の大学でなくて申し訳ありませんが、今文部省は単線ではなく複線構造といっていますが、それは今のところ中高一貫教育というような形でしか進んでいません。ですから須田さんがおっしゃるようになり換え自由というような教育というのはこれから非常に大事ではないかと思った次第です。

それでは南山大学のMARXさんお願いいたします。



パネラー Hans-Jürgen MARX

ドイツの中等教育は複雑構造になっている。大学になって初めて専門課程を学ぶ日本の教育は特殊だ

【MARX】ただ今ご紹介いただきましたMARXです。

今、須田先生から鋭い指摘とかなり厳しい課題を承りました。わたしは教育界の代表者でもございますので、特にここ数年来教育界に出された様々な産業界からの提言を踏まえたうえで「職業意識の育成」という観点から、多少ともドイツと日本の大学の教育を比較してみたいと思います。

ご存じのようにドイツの教育制度の最も際立った特徴は、中等教育の複雑構造にあるように思います。実践的な職業教育と進学コースの2つに明確に分けられていてまして、義務教育修了の年齢は日本と同じように15歳あるいは遅くとも16歳です。すべての子どもは、基幹学校（私の時代は国民学校と言いました）で日本の学校と同じような単線教育を4年間受けますが、出てから3つのグループに分かれます。

1つのグループは基幹学校にそのまま留まります。そして4年間勉強しますので合計8年間勉強します。

もう1つのグループは進学を目指すグンナーションです。9年間で日本の高等学校に当たります。

もうひとつは理工系の科目を6年間勉強する実課学校があります。

基幹学校を出るとすぐに企業に就職して3年間の見習いをしながら、自分の職業に合うような教育を職業学校で3年間受け、18歳になったとき専門労働者になります。

グンナーションを卒業した者は卒業と同時に大学への入学資格を得ます。どこの大学にもどこの学部にも試験なしに入学できます。ですから高等レベルでの教育は決して入学進学だけのための勉強ではありません。高等教育部門では総合大学と専門単科大学の2つからなっています。ここにも複雑性があり専門単科大学は実践性や実用性の高い、例えば経理、経済学、工学、社会福祉関係などの勉強が行われます。総合大学の内容は理論指向が強く、研究中心またはエリート教育が中心に行われています。私がグンナーションに通っていた1963年ごろはグンナーションへの進学率は15%程度で、当時国民学校と呼ばれていた基幹学校には約70%の人が留まりました。それが最近ではグンナーションへの進学者は30%あまりに増大し、実科学校への進学者が増加している反面、基幹学校に残る生徒が20%までに減少しており、急激な高学歴傾向を見せています。

それではドイツの大学の特徴は何かと言いますと3つの点を挙げる事ができます。

まず第1に大学は純粋学術的研究指向が強いということです。ドイツにおける大学の卒業レベルはほぼ日本の修士課程に当たります。大学の課程は基礎課程と専門課程に分かれています。その途中の中間試験に合格しても就職活動を行う上では何の資格にもなりません。だから大学に入って卒業するまでは何の資格も取れません。卒業した段階では日本の修士課程に当たるような資格を取れます。

また先程言いましたように医学部以外は入学試験はありませんが、医学部は席が空くまで待つということがありますが、それを除けばどこの大学でもどこの学部でも自由に入ることができるとも自由です。しかし、出るのが大変です。

私の学校の場合ちょっと特殊なケースで、私は神父になりたい人の学校だったので、学校とは関係なく辞めた人もいます。入学した段階では70名以上いましたが、アビトゥを取ったときには13名でした。かなり厳しいエリート教育と選択が行われます。ただし留年になったり、ついて行けなくなった場合には元の学校にはいつでも自由に戻ることが出来ます。

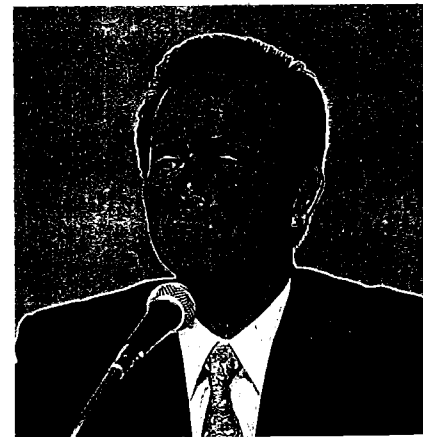
基幹学校の義務教育が終わるまでは自由に戻ることが出来ます。

こうした事情ですから日本の教育とドイツの教育と学校レベルでの教育がだいぶ違うので、それほど日本がドイツから学ぶことはできないとは思いますが、でも、どちらかというところ欧米全体に比べると、むしろ日本の教育があまりにも特殊であり過ぎると申し上げて、とりあえず終わります。

【横内】ありがとうございます。ドイツの大学は入るのは優しいけれども出るの難しいというお話でした。

先日10月26日でしたか、大学審議会が「21世紀の大学」というヴィジョンを出しました。遅ればせながら「日本も成績評価を厳しくして、出にくい大学もっていこう」とようやく答申が出た段階です。そういうことでドイツの大学の事情をお話いただきました。

それでは、次に石田さんにお願いしますが、石田さんはライラの活動と青少年奉仕の活動をずっと続けて来られた方ですので、そういう活動の実践例をお願いいたします。



パネラー 石田 喜運

群れの中で自己学習することが大事ではないか。社会生活の場としてライラセミナーは非常に有益である

【石田】ただ今紹介いただきました石田です。須田さんが素人なら私は全く教育に関心ない人間です。本日のパネラーを仰せつかりまして、あまり変なことを言うてはいけないうと思

い本屋に行って見ました。そうすると驚いたことに、教育白書から各学年に対しての指導要綱、現代の登校拒否児やイジメに関するあらゆる本が揃ってまして、圧倒され、この問題の大きさを痛感した次第です。

ただ、その本を数冊買って読んでみますと、先程基調講演をしていただきました松本先生のような、いわゆる心理学や精神学のカウンセラーの方でなければ分からないような内容が大変多かったように思いました。これではどうしようもないということで、今日は、私がかつてPTA会長をしていましたころ印象に残ったことをお話しします。

今から17～18年前ですが、NHKが「日本の子どもたち」という調査をまとめたことがあります。現在すべてを覚えていませんが、大きな点で私が驚きましたのは、子どもたちが「大人になりたくない」という傾向が、もうその当時出ていました。先程の松本先生のお話のなかにありました「甘え」とか「将来に対する不安」が原因で大人になりたくないという子どもたちが大変に増えているというのです。

それと視力が非常に弱く、清涼飲料水の飲み過ぎで骨が弱い。そして反射神経が非常にニブくて、つまづくと手をつかずにおでこをぶつける。それからすぐ疲れる子が非常に多いという事が出ていました。これは人間としての五感を含む身体機能の低下だと思います。

そして私が今日一番問題にしたいことなのですが、この17～18年前の時点で、「友達は同級生ばかりで近所の子どもたちとほとんど遊ばない。遊ぶときはテレビを見ているかテレビゲームをしている」ということで、縦社会が崩壊している、将来この子どもたちはどうなるのかと心配をした記憶があります。

これも先程松本先生からお話がありましたように、やはり人類が高度な技術や文明、そして成熟した社会を得た結果として残ったのではないかと、そういう意味では何か大切なものを忘れて来たという気がしています。

今、教育は「家庭教育」「学校教育」「社会教育」と呼ばれています。4日ぐらい前に教育改革が発表されましたが、「これから子どもたちの余暇の時間が増えるが、受け皿をどうするのか」ということは書いてなかった

ように思います。そういう意味ではこの受け皿をどのようにするかということが今後の大きな課題になるような感じがいたします。

ここで私が一番問題提起したいのは、私どもの小さいとき（私は昭和16年生まれなので終戦後のひもじさを知っています）テレビもありませんしガキ大将と一緒に遊んでいたのですが、ガキ大将にイジメられて納得しないけれど我慢しなければいけない、怒れるけれども我慢するという子どもも社会の中で、いろいろ耐えろとか、喜びとか怒りとかを経験してきたような感じがしています。私が17年前PTA会長をしていたころには、そういう子どもがもうすでに無くなっていました。そうすると家庭で一所懸命教育しても、学校で知識教育を一所懸命しても、やはり私は、人間は自分自身が群れの中で自己学習していくのが大事ではないかと思えます。その子どもも社会が崩壊した現在、それをもう一度立て直すというか、もう一度創造して行く努力が必要だと思えます。

現在、例えば伝統のお祭りがある地域などではそういう社会コミュニティが息づいていて、そういう地域ではトラブルが少ないと聞いています。その他の県民少年団とかボーイスカウトなどのグループというのは、ボランティアという非常にはかない団体に支えられているのですが、何とか、もっと行政が真剣に取り組んで行く必要があるのではないかと思います。

先程私は、お隣のMARX先生に確認の意味でお伺いしましたが、ドイツでは国家公務員はボランティア奉仕をするという制度があるように聞いています。そういう意味で、日本も国家公務員がそういうことにもっともっと積極的に取り組んで行く必要があるのではないかと、思っています。

私どもは先程ご紹介いただきましたように、豊橋市内10校の高校生のボランティア活動のネットワークを5年間かけて育成してきました。この子どもたちは大変素晴らしい子どもたちで、「高齢化社会に対していかに私たちが奉仕をするか」というテーマをもって活動しています。

しかし、この子どもたちが先般日本海でソ連のタンカー沈没による重油流出の際、「奉仕作業に行きたい」というのも先生の許可が出ないために行け

ないと言ったようなことがありました。今、私どもがこの奉仕活動を支援をしていく中で、行政の壁が非常に厚いことを感じます。これをどうクリアするか、私どもが提案している「ボランティアネットワーク」が成功するか、しないかということだと思っています。

そして本年度、私どもは10周年を記念しまして、「何か良い事業ができないだろうか」ということで、企画からすべて子どもたちをお願いして、ボランティア交流会議をやるということになっています。現在子どもたちは実行委員会を編成して会議に取り組んでいます。こういう子どもたちの姿を見ますと本当に素晴らしいと思えます。

それと先程もご紹介いただきましたが、私は昨年度ライラの総委員長を仰せつかりましてライラセミナーをさせていただきます。

本音で言いますと「どちみちロータリアンの皆さんも義務で来るのだし、受講生の人もロータリアンに言われて無理やりくるのだから、そんなものをやっても意味がないのではないかと、いう声も私どものクラブでありましたが、いろいろ実行委員会の皆さんに努力していただきまして、「そういう形で来た人でも、帰るときには「良かった」と言って帰っていただく。一生懸命にやろう」ということで大変熱心にやっただけ、そして主催いたしました。

「国際化」というテーマでしたので、ロータリー財団奨学生の方々と米山奨学生の方々に10の分科会の中に一人づつ入っていただきまして、1泊2日の討論会をしました。

そのときに私どもは米山奨学生の皆さん方や日本の受講生の生徒さんに感想文を書いていただきました。

それを見ますと、私は大変驚いたのですが、日本の高校生の感想文に「米山奨学生の方は国のために勉強している。家族のために勉強している。素晴らしい」という意見がありました。それに比べ、今の日本の若者がどうであったか、米山奨学生の皆さんの感想を発表させていただきます。

「日本の若者は自分に直接に関係しているものについては非常に関心を持っている。しかし自分に直接関係のないものには全然関心を持たず、そのよう

なことについて知識も余り無い。日本の多くの若者は両親からヘンに独立している。アルバイトのお陰でお金持ちであり、お金さえあれば独立だという考えを持っている。そして社会もそのような考えを子どもに持たせているのではないか。よって大人のような気分になり、本当に大人になったときは子どもっぽい考えが表面に出る」。

「日本の若者はプライベートなことはあまり表に出さない。だから、いったん自分が乗っている軌道から外れたらもう一度戻ることができず、逆にどんどん離れて行く恐れがある」。

「日本の若者は物理的価値を持つものを中心にものを考える。お金の換算した価値やステータスなどで自分をアピールし、他人についての評価も同様に行っている。よって良いことはどんどん消えていき、外見的なものだけよくしようとしている」。

「日本の若者は政治について関心を持っていない。そして当然のことに政治に参加することもほとんど無い。そして一般の若者が持つ国際情勢についての知識も他の国の若者より少ない」。

私もはライラセミナーをやってみまして、このセミナーはこれからの若者の社会生活の場として非常に有益ではないか、そういう意味では現在ロータリーが提唱していますインターアクト、ローターアクト、ライラは、ある意味でいえば私もロータリーが取り組める大切なプログラムではないかと思えます。

ここでPRさせていただきますと、来年の3月当地区のライラセミナーがあります。各ロータリークラブのエリアにお見えになります若者に、こういうディスカッションの場に参加する機会を与えていただければ大変意義ではないかと思えます。

【横内】どうもありがとうございます。

石田さんが今触れられましたボランティアということにつきましても、またちょっと教育の話で恐縮ですが、18日に文部省は公表しました新学習指導要領（2002年から実施されますが）に初めて学校の行事の中に「ボランティア」という言葉を取り入れ、ボランティア活動（特別活動という項目ですが）を進めているところがあります。そういう意味で「学校もクラブ活動などボランティアという側面もしっかりやり

なさい」と文部省もようやく動いたということです。

それでは次ぎに木村さんをお願いいたしますが、木村さんは千種高校の先生でインターアクトクラブの顧問をされており、高校生をオーストラリアの方に体験のために連れて行かれたというご経験もあります。よろしくお願いたします。



パネラー 木村 友保

### 若者の遊びの時間が少なくなってきたことは問題だが、機会を与え続けることができれば十分に生きる力がある

【木村】基調講演から始まって今に至るまで皆さんの話を聞いておりました。だんだん暗くなって来ました。

まず、松本先生からは「幼児期の親子関係が大切だ」というお話でした。その結果マズイ関係になっている生徒も実は私たちの中にもいます。そういう人も指導しなければいけないとなると大変ネガティブな印象を受けました。次ぎは企業の人から、中部圏の教育の貧困さということで「あまり魅力がない。だからここに集まらない」と言われました。私はこの地域の大学を卒業しているので、ますます暗くなりました。そしてドイツの方からは「日本は特殊である」と。これはかなりネガティブな印象を受けました。そして今もまた「いろんな外国人との交流の中で日本の学生はあまりいいものを持っていない。むしろネガティブな

印象を与えている」、こんな印象を受けました。

そうなってくると私はしんがりを務める関係上大変苦しくなりますが、確かに今まで言われたことすべて認めざるを得ない面があります。

しかし、私は今年シドニーに海外研修させていただきまして、10日あまりですが30数名の生徒に触れ、学校ではインターアクトの顧問として日ごろ生徒たちと接し、また今年ロータリークラブの留学生を一人受け入れて、そういう生徒たちと接していると、「決して捨てたものではない。生きる力を十分にもっている」と皆さんに断言しておきたいと思えます。生きる力はあるのです。ただその使い方を知らない。そういう感じがします。「社会は若者に生きる力を十分に伝えてきたか」というと、かなり疑問が残るのではないのでしょうか。

今「政治の話は日本の学生はしない」と言われました。それはあくまでも機会が無いだけであると私は思えます。私の生徒たちは——（これは特殊だと言われれば言えますが）私の学校は能力的には高いと言っても社会や政治経済のことに、どれだけ関心があるかという大変危うい生徒がたくさんいますが——政治経済について十分に意見を論じ合います。実際に、時事英語というクラスでは、「核問題について、パキスタンとインドの核実験についてどう思うか」ということに関しても立派な意見をきちんと述べています。

ですから私たちが機会さえ与えれば十分に現代の若者も生きる力を持ち得るということを感じて止みません。

もうひとつは今私が若者たちを見ていて「遊びの時間が少なくなってきたこと」がかなり大きな問題ではないかという印象を受けています。

インターアクトというのは学校の効率から言えば大変ムダです。遊びの部分に属します。しかしそれが大変価値のある事だと日ごろ生徒達と接して感じます。

ではそのことと、海外研修の意義について述べたいと思えます。

7月下旬、荻本委員長、多田さん、加藤さん、森先生、そして私を含めた5名で36名の愛知県中の生徒を引率してシドニーへ行きました。たった10日ですが、わずかに10日にして1年、いやそれ以上の効果を私たちはなし得たと

思っています。

なぜかと言いますと、私たちが見る限り生徒たちは決してバラ色の生活をしてはおりません。ある生徒は不安に駆られていました。またある生徒は全然英語が話せない。またある生徒はホームステイ先のお母さんとずっとうまくいかない。

しかしですよ、表面的には英語が話せない、ホームステイ先とうまくいかない、といってもそれが終わった後の飛行機の中での会話を聞きますと「あ！あの10日は十分に生きたんだ」という事を感じました。

一つだけ具体例を申しあげましょう。それはホームステイ先の人とうまく行かなかったある一人の生徒ですが、この生徒は私たちが見えてもどうしようもないほどうまくいきませんでした。最後は向こうのコーディネーターと相談をして「ホームステイ先を変えたらどうか」というところまでいきましたが、結局はもう数日しか残っていなかったので変えませんでした。

最後の日、ホームステイ先のお母さんが彼女一人にパンとヨーグルトと果物を携えてきて「帰りに食べなさい」と言われました。そのときでさえも彼女はあまりいい顔をしていませんでした。なぜ最後の最後までこのような関係が続くのだろうと思いましたが、飛行機の中で彼女は私にそのヨーグルトをくれ、また果物を友達に分け、そして彼女は「やっぱり私はあのときいい経験をしたのだ」と飛行機の中で言ったのです。

私たちは、こういう活動を通して、そんなところにも目を向けて行きたいと思えました。次ぎはインターアクトクラブへの大きな支援をロータリークラブの皆さんがしてくださっていることに心から感謝したいと思います。

私は学校でインターアクトクラブの顧問をしていて生徒たちを横で見えますと、手話とか点字とか、その他の活動をしたいという生徒が多いのですが、私はすべてに関わることはできません。

ですから、例えば「点字を習いたいから1週間に1度先生を呼んでください」と生徒が言いますと、その手配をします。しかし実際のその後の運営はすべて生徒任せです。そして手話も先生を呼びました。そして今は生徒だけの力で運営しています。私は事務的な

手続きだけです。

そういう活動を見ていると生徒たちは決して自主性が無いわけではありませぬ。どんどん自分たちからアイデアを出して新しい活動に発展しています。

こういう姿を見ますと、先程から「生きる力がない」といろんな人が言っておられたように思うのですが、決して決して悔れない力を若者たちはもっているということを確信します。ですから、ただ「その機会を与え続ける」ことが大切ではないかと思いました。

そういう意味で、ロータリークラブの皆さん、本当に今まで通りこれからも支援をお願いいたします。

それからもうひとつ、私たちは手話とか点字を見ますと、点字は目の見えない人に対してのコミュニケーション、話せない人たちに対しての手話ということで内にもこるコミュニケーションという感じがしますが、そういうコミュニケーションを通して、日本にいながら生徒たちは内なる国際化の意識を少しずつ持ち続けています。そういう会は素晴らしいと思っています。

そして実際に生徒たちは今（これは内緒ですが）授業中に手話で内緒話をしています。先生には全くわかりません。これを私は「いかな」と思いながらも許してしまっていますが、これは素晴らしいコミュニケーションの手段です。

一方で実際に海外の人とも交流会の場を持っていて、一社には名古屋国際研修センターがありまして世界70ヶ国の人々が来ています。英語圏以外の人達ですから英語もうまくありません。今まで私がついて行って通訳していたのですが、生徒たちは完全に私に頼っていたのですが、最近は生徒の方から「先生、向こうに行って」というものですから、私は隅の方で個人的な教員のための研修会の交渉などを行っています。生徒は中央に陣取って数人のグループで研修生と話しています。

先日、前のインターアクトの役員たちの最後の会があったときの帰りに彼らが言いました。「先生今日の研修会は素晴らしかった」と。私が聞いていても決してうまい英語はしゃべっていませんでした。向こうの人もうまくないけれども、英語を通しコミュニケーションしている自分たちの行動に対して感動を覚えたようです。

こういったこともロータリークラブから支援を受けているからできることであって、これからも続けていきたいと思っています。

そして最後に、私たちは留学生を受け入れていますが、今年はカナダから来たトーマス・ジョン・ハモンドという生徒でした。この生徒は始めはなかなかうちの学校に馴染めなかったのですが、最近少しずつ馴染んでくれるようになりました。私はこの生徒に多くの機会を与え、また日本人の生徒にも彼の考え方を知らせたいということで、ライティングの授業のときに彼にエッセイを書かせています。彼が書く毎回すべての人に公表されるわけですから、彼は良いことを言っていますので、最後にそのことを紹介させていただいて終わりたいと思えます。

彼はエッセイ『私の夢』の中で「人々の間で違いというのはごく自然なことである。しかしその違いというものによって、ある人がある人よりも優れていると言うふうを考えるのは愚の骨頂である。こういう考え方は改めなければいけない」というようなことを、他の生徒に強く訴えるように書いていました。以上です。ありがとうございました。

【横内】どうもありがとうございます。

今のお話で子どもにはチャンスを与えれば十分にそれに答えられる力をもっているというお話でした。

私の友人に先生をしている方がおりました「最近授業をやっているもガヤガヤ私語ばかりなので『黙れ!』と言っても黙らん』と言っておりましたが、今度言ってやります。『黙れ』と言わずに『おまえら手話を習え』と言え」。こういうのがいいのではないかと思えます。

それでは一通りご意見を伺いました。後3分ぐらいづつ、ご提言あるいは言い残されたことなどをまたもう一度内藤さんの方から順番にお願いしたいと思えます。よろしくお願いたします。



## 悪いことは「悪い」と、心を添えて教えることが大切

【内藤】いろいろ先生のお話しを承っていて、また、私が平素考えていることから考え合わせますと、やはり日本人は農耕民族的に地道に一つの方向を行くという単純性を持っていて、狩猟民族的なファンデーションがないように思います。ですから、いろいろ自主的にやれる能力はそれぞれ持っていると思いますが、基本であるスタートポイントの小・中学校までは、「教えて育てる」ということで、やはり手を差し伸べて育てる必要があると、ただ自由を与えるということでは、なかなかこういう日本的な風土では育たないのではないかと思います。

最近では優秀な方が小・中学校の教員になられますが、しかしやはり日本人としての教育のファンデーションというものをキチッと身につけて、暖かみを持って、単に教科だけを物理的に教えるのではなくて、先程儒教的と申しあげましたが、私は昔の師範学校のように「心」を添えることが大切だと思

います。

家における母親や身内の者の暖かいいたわりの中から人間性が生まれるという話からも、「後は自分でやれ」ということはかなり成人してからはいいのですが、小・中学校ではある程度ほったたてをはたいても「悪いことは悪い」と教えることが大切だと思います。一方的に教えることならデジタル・コンピューターでできることですが、そこがやはり教育というものは「心の通った心の通った教育」を温かい心を持った先生が教える。そうして、自分で悟らせるということではなくて、間違っただけは「間違っている」とある程度は、体罰といつてはひどいかも知れませんが、そういうこともやらないと基本ができないのではないかと思います。

そういう面で私は、教員がある程度の強制をして社会を見る目を生徒に養わせないと、ただ自由放任にしてセレクトさせることはできないのではないかと思います。

【横内】はい。ありがとうございます。それでは須田さんお願いします。

## 教育の神髄は「心」、そこにウエイトを置き常在教育を再考したい

【須田】21世紀まで後2年です。そろそろ「21世紀には何をするべきか」ということを世の中で言う時代が参りました。

「教育の21世紀」というような大それたことは申しませんが、将来の教育のあるべき姿として、素人はかく考えたいことを一言だけ申しあげたいと思いますとき、私は「常在教育」「常にある教育」「いつも教育はある」ということがひとつのコンセプトになっていくのではないかと思います。

2つの方向があると思います。

ひとつは「すべての人が教育に携わるのだ。教育というのはなにも特別の人がやるのではなくに全員、全国民がすべて教育者なんだ」という考え方の基に立って見たらどうかということが第1であります。

2番目は「生涯教育」つまり教育というのは学校だけでやるのではなくて、生きている間すべて教育がついて回るのだということを私は考えてみた

い。つまり特別な人がやるのではなく、また特別な場所で受けるのではなく、教育というのは常に自分たちの身の回りにあるということです。

もう少し補足をしますと、例えばすべての人ということ、親が子どもの教育をするのは当たり前のことですが、夫婦同士でもお互いに教育し合う立場にあると思います。「老いては子に従え」ではありませんが、子どもに教育される面があってもおかしくないと思います。

ですから「教育は学校の人やるんだ、子どもはやらなくていい」と責任を学校に転嫁するというのは非常にマズイと思います。すべての人が自分は教育者だという気持ちに立ってやっていたら、随分私は教育というのは違った局面が生まれてくると思います。その場合あくまで学校なり先生というのは一つのスタンダード（基準）を提供するものでありコーディネーターである。学校はひとつのプラットフォームに過ぎない。私はそのように思います。

次に「生涯教育」の現状を見ますと、非常に憂慮すべき状況にあります。子どもの例を見てみますと、勉強しているのはせいぜい高校ぐらいまでで大学に入りますと、希望の大学に入った場合もそうでない場合も、「大学に入れば勉強はもう終わりだ」と、大学にリゾートウエアを着て、あるいはリクレーションに行くような態度で学校に行っています。すべての人がそうではないと思いますが、大学を歩いていてもレジャーランドとどこが違うのかというような学校が少なからずあるということは遺憾ながら事実です。

あれは受験勉強が教育のすべてであって、大学は息抜きをして就職活動をする場所だと思っているからなのです。教育が全く行われていない。

つまり教育というのは生まれてから教育が行われるものでありますし、学校を卒業してからも教育が行われなければいけないのです。「生涯教育」というのはそういう言葉なのです。我々も教育を受けなければいけない。私自身も教育を受けてもう少し叩き直してもらわなければいけない点があると思いますので、これから少し暇になりましたらいろんな勉強をしてみたいと思っていますが、なかなかそうはいかない。しかし教育というのはそういうものではないかと思います。

最後に申しあげたいのは内藤ガバナのおっしゃったことと全く同じことですが、「デジタル時代にアナログ時代の心を」と申しあげたい。

つまりこれからは情報化の時代ですが、情報化を支配する21世紀の技術はデジタル技術です。デジタルというのはすべてのものをゼロと1に置き換えて、この信号ですべてのものをやっということとします。あらゆる信号に互換性がありますから、あらゆる情報処理が非常にスピーディで効率的に行われるのがデジタルだと思います。これは21世紀の大きな柱だと思います。

ただ、心がゼロと1になったり〇と×になったりしたら、どうしようもないと思います。日本語というのは非常に言葉の豊かな言葉だと言われています。もしこれがデジタルに徹していけばみんながモルス符号で会話するような時代が来ないとも限らない、そういう時代は殺伐たる時代になると思います。まさか言葉がモルス符号に置き換わることは無いとは思いますが、放っておくと実際上それに近い姿がデジタル時代に起こるのではないかと思います。

これを避ける道はやはりアナログ時代に培われた心ではないかと思

います。教育の神髄は「心」だと思います。そこをウエイトをおきながら常在教育という立場に立って、私ども身の回りをもう1度見回してみたいものだと思います。非常に浅学非才が考えた素人論で恐縮です。ありがとうございました。

【横内】ありがとうございました。それではMARXさんお願いいたします。

## 最大の問題は親不在の家庭。意識を改める必要がある

【MARX】私がここにくる途中、私中の駅の近くにある三洋堂で、今週のドイツの週刊誌「デシベルド」を見ましたら、特集として「教育は無意味なのか、親には影響がない」という見出しがしていました。教育は決して日本だけのものではありません。とりわけ先進諸国ではどこでも恐らく最大の

問題とされております。

そして木村先生に申しあげたいのは、「特殊であり過ぎる」と申しあげた理由がすべてネガティブという意味ではなくて、職業意識の育成につながる教育という観点から見ると、日本の単線的な一律教育はちょっと特殊であり過ぎるような世の中であるというように意味です。大学生になってから初めて専門課程を受けれるというような教育は、やはり日本以外には例を知りません。

まだ全部読んでいませんが、ドイツの週刊誌の場合何が問題かという、学校の教育制度が子どもを抱え込み過ぎると親の影響がなくなるということです。どちらかというと、学校より家庭こそ教育の場であるという考え方をドイツあるいは欧米諸国は目指しています。私も学校にいたのは午前中だけです。午後は家にいます。そして父親も午後4時には家に戻って、私たちと一緒に合同作業をしたり遊んだりします。これはまさに須田先生がおっしゃった常在教育であって、教育というのは社会のすべてのものがやることであって、決して学校だけがやるものではない、学校はまさにコーディネーターに過ぎないと言ったことをまず申しあげたいと思います。

先週のニューズウィーク——英語版もあるので恐らくご覧になった方もあるかと思いますが、そこでも教育が特集でした。今回は日本の教育でした。何が問題にされたかという「日本の青年の倫理観がだんだんなくなるし平気で人を殺したり、いろんな問題があるが最大の問題が親不在の家庭だ」ということです。正確な数字を忘れましたが、2割か3割近くの家庭が親と別々に食事をする、親と接する機会がほとんどない、あるいは朝、母親も仕事に出掛けるので子どもはカップヌードルを自分で作るとか、こういう家庭に育ちますと確かに心の教育どころか基本的な判断とか情緒性とかが育ってこない。ドイツ語で「ハンスチャン（学ばないこと）はハンスクル（いつまでも学ばないこと）」と、つまり母親と子どもとの関係は先程松本先生がおっしゃった通りのことです。

もうひとつは、以前は私は父親不在の家庭という問題を強く感じましたし、今でもそうだと思いますが、母親不在の家庭になるともうどうにもなら

なくなる。それがとても怖いことです。それについて確かに日本全体が意識を改める必要があるかと思えます。

【横内】ありがとうございました。今MARX先生のお話にありましたが、最近の統計でも朝ごはんを食べない子どもたちが20%ぐらいいるそうです。そして、朝ごはんを食べる子どもたちに「家族と一緒に食べますか？」という質問をしますと「食べます」という人が半分ぐらいしかいない。そういう状況にあって特に朝ごはんを食べないという子がカッとしてキレるらしいです。ですから「朝ごはんは食べて行きなさい」と言わなければいけないかも知れませんか。

では石田さんお願いします。

これからは「教える」のではなく「育てる」ことにウエイトを置いた取り組みを

【石田】今ずっと話を聞いていまして「教育とは何だ」という事をちょっと考えました。文字を見ますと「教える」という字と「育てる」という字の複合です。「教育」というと私どもはすぐに学校教育を思い出しますが、かつて日本には「子どもは国の宝だ」とか「百年先を見て人を育てる」とかいう諺がありました。これは「育てる」ということが基本になっていたような気がします。

現在のような成績偏重の時代にはどうしても、教育というと学問となるわけで、「教える」というと結局「知識を持ったり技術を持った人が、ない人に教えること」で、これは義務的に行けるといふように思います。ただ「育てる」ということは「養って成長させる」とか「教える」とか大変難しい問題が潜んでいます。そういう意味ではこれからの教育は「教える」というウエイトではなくて「育てる」という方にシフトをおいた教育、取り組みが必要かなと感じています。

【横内】それでは木村さん。最後になりましたが。

持っているモノの中により多くの恵みを見いだすことができる子どもを

【木村】また須田さんの話を聞いていて思い出したことがあります。

私事で恐縮ですが、私はみんなが高校に行くから高校に行きました。みんなが大学に行くから大学に行きました。そしてみんなが一流企業を目指したから私もまずまずの所に入りました。そこまでは自分というものがなかったように思います。そして会社に入って働いているとき、ある機会に恵まれて一念発起をしました。「これで私の人生が決まった」とやりだしましたが、そういったときでも、それを受け入れてくれる教育制度があることが大変大切だということがわかりました。そして実はMARX先生の大学に受け入れていただいたのですが、そういう教育制度がますます普通になっていかなければいけないということを感じました。

もうひとつは、今本当に物があふれています。より多くのものを求めている子どもたちが増えているのですが、これからますます「自分たちが持っているものの中に、より多くの恵みを見いだすことのできる子ども」を育てなければいけないと感じました。

実はインターアクトで読んでいた本があります。それはイギリスの童話作家でロルド・ダールという人の『チョコレート工場の秘密』という本です。これは大変貧乏なチャーリーという子どもを主人公にした話ですが、この子どもは一年中水っぽいキャベツのスープしか食べられません。ただ1日だけ特別な日があります。誕生日です。この誕生日の日だけは板チョコを食べられるのです。そしてこの板チョコを誕生日にもらうと、自分の机の代わりにしたリング箱の上に乗せて10日あまりもたせるのです。じっと眺めては少しかじり、少しずつ味わいながら食べていきます。その描写がすばらしいので、私たちは生徒と一緒にこういう感激とか、そういうものを味わっていかねばいけななと思いました。より多くのものを求めるのではなくて、今持っているものの中に大きな恵みを感じような子どもを育てて行きたいなと思えます。

心に火を点ける教育を。そして、その火が世界中に、21世紀に向けて灯されていくことを願っています

【横内】まだまだご意見を伺いたい所ですが、ほぼ予定の時間が参りました。それで私はまとめと言いますとおこがましいのですが、今お話しのとおりです。皆さん方も十分ご理解を頂戴したと思います。

内藤さんはOX式の今までの教育、単に教科を教えるだけではだめだと、心を添えた血の通った教育をしなければいけない。つまり須田さんがおっしゃったことと同じでデジタルの上にアナログの精神、心をと言うことでしょ。

須田さんは複線教育、(昔、武士は常在戦場でしたが)今は常在教育でなければならない。すべての人が教育者でなければならない。社会全体がそうしなければならない。学校だけに責任を押し付けるのではだめだと言うお話しでした。

MARXさんもドイツでも学校より教育は家庭にあるというお話しでした。石田さんも問題提起として子どもたち自分自身が子ども社会の中であって、自己学習をして強くなっていかねばならない。ボランティアというような社会的な行動のなかで取り組んでいくことが大切だということで、ここにもロータリーの非常に大きな役目があります。

木村さんは今のお話しのように、子どもたちの生きる力を信じて、大いにこれからもやっていただきたいというお話しでした。

最後になりましたが、私も今日の皆様方のお話で大変感銘しました。特に、内藤さんがおっしゃった、先生は単に教科を教えるのではなくて、心の通った、悪いことは悪いと言うことを学ばさなければいけない、ということでした。

私はつい最近ですが名古屋市の永年勤続の表彰式がありまして、教育委員会という立場からお話しをさせていただきました。そのときに引用させていただいた言葉がテーク・アサワードという人の言葉で、「平凡な教師はただしゃべる、少しましな教師は理解さ

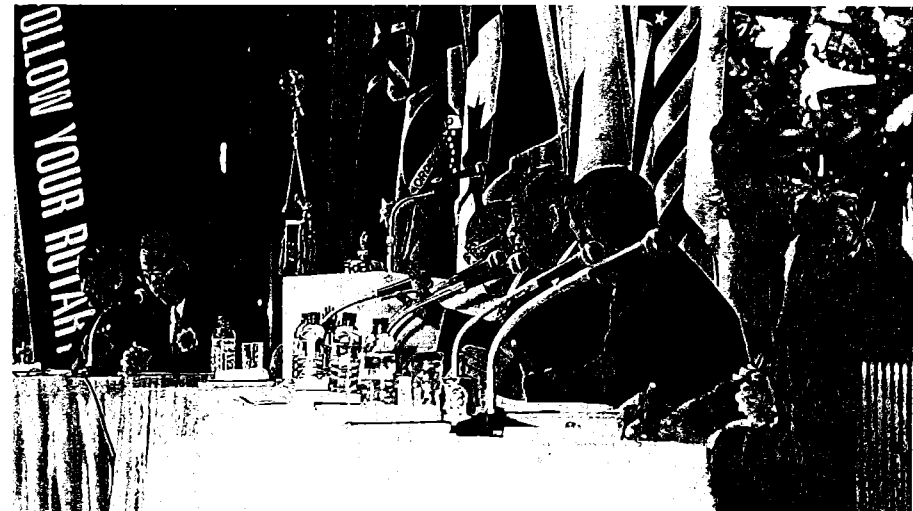
せようと努める、優れた教師は自らやって見せる、本当に優れた教師は心に火をつける」という言葉です。まさに「心に火をつける」ということは、教師だけではなくて社会全体、父親母親はもちろんですが、すべてが子どもたちに火をつけてやらなければいけないと思います。

たまたまパストガバナーが半田のご出身でご在住ですので、半田出身の童話作家新美南吉の童話『ひとつの灯』をご紹介します。

牛飼いが夜に店に来て「ちょうちんと火をください」と言います。子どもが「ローソクに火をつけてくれ」と言ってマッチを初めてすって渡しました。そうすると子どもが思うのです。「このちょうちんは山を越えて向こうに行く、そうすると旅人に会おうだろう。旅人がそのちょうちんの火を貸してくれというかもしれない。すると旅人がそのちょうちんを持ってまた山を越えて行く。すると向こうの村人たちが騒いでいる。『子どもがキツネに化かされてどこかに行ってしまった。今鐘をたいて探しているところだ。そのちょうちんの灯を貸してくれ』と言う。そしてその火が村人に移される。そして次から次に火が灯されていくのを子どもが想像します。童話の最後は「私は今でも、あのとき牛飼いのちょうちんに灯してやった火が、次から次に移されて、どこかに灯っているのではないかと思います」。こういう具合に結ばれています。

子どもは子どもたちに今一つの灯を点けてやって、そしてそれが日本や世界、それから21世紀に向けて次から次に灯されていくことを願っている、これが現在の私の心境です。

それではこれでパネルディスカッションを終了させていただいて次にR.I.会長代理の小谷さんから講評をちょうだいしたいと思います。よろしく願いいたします。



### 旧制高等学校の3年間の寮生活を惚れ惚れと思い直してしまいました

【小谷】時間もないので一言だけ申し上げたいと思います。

感心して聞いていました。私は教育にあまり熱心でなかったのにそんな印象があったのかも分かりませんが、この地区において松本先生を初めとしてこれだけ専門の方々がおいでになるということをややましく思いました。ぜひこういう探求を続けていただきたいと思います。

私自身のことを少し申し上げたいと思います。私は旧制の松本高等学校を卒業しました。京都から名古屋を通って松本まで車で行ったのをよく覚えています。その松本で過ごした3年間の寮生活、この旧制の高校の教育に本当に惚れ惚れと思い直している次第です。

今日ご出席の方々の中にももうそんなに多くおいでにならないと思いますが、旧制の高校の卒業の方がおいでに

なりましたら、そういうご意見も反映させていただいたら本当に幸せだと思います。時間がありませんので割愛させていただきます。どうもありがとうございました。

【横内】ありがとうございました。私は松本旧制高校が新制になりました信州大学文学部の出身です。先輩に見習ってこれからも一所懸命やっていきたいと思えます。どうも今日はありがとうございました。

——本当に熱心なご意見をたくさんいただき誠にありがとうございました。これだけの論客がそろっていらっしゃるというのが実感です。各クラブでも、広い意味での教育問題について語る機会を持っていただければ大変幸いです。

ありがとうございました。これでロータリーミーティングを終わります。

